

氏 名 イワ シタ ショウ コ
岩 下 晶 子
学位の種類 博士 (音楽)
学位記番号 博音第220号
学位授与年月日 平成25年3月25日
学位論文等題目 〈論文〉ネッド・ローレムの歌曲研究 — アメリカ詩による歌曲に於ける
— 考察 —

〈演奏〉 Lee Hoiby always it's Spring
What if...
Jabberwocky
John Musto Dove Sta Amore
Ned Rorem Early in the Morning
I strolled across an open field
Orchids
Little Elegy
The silver swan
My papa's waltz
To a Young Girl
O you whom I often and silently come
The Lordly Hudson
Stopping by Woods on a Snowy Evening
Memory
Look down, fair moon
The Serpent
Rain in Spring
I am rose
O do not love too long
What if some little pain...
Visits to St. Elizabeths
I will always love you
Alleluia

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	永井和子
(副査)	〃	〃	(〃)	成田英明
(〃)	〃	准教授	(〃)	菅英三子
(〃)	〃	非常勤講師	(〃)	佐竹由美
(〃)	〃	名誉教授		朝倉蒼生

(論文内容の要旨)

本論文はネッド・ローレム (1923-) のアメリカ歌曲のうちアメリカ詩によるピアノ伴奏独唱歌曲を対象を絞り、詩の内容と音楽的表現の関わりについて、演奏家の視点から分析し考察した。

第1章ではローレムの経歴と作品について概観した。

第2章第1節においてアメリカ歌曲の歴史、代表的な作曲家ごとのアメリカ詩による作品数を概観したところ、ローレムは多作でアメリカの詩人を多く取り上げていた。第2節ではローレムのピアノおよび管弦楽伴奏による、独唱と重唱歌曲作品の詩人を集め分類した。それにより、アメリカの詩人ではローレムと同年代か近い時代の詩人を多用し、アメリカ以外の英語圏の詩人では、1600～1800年代の詩人が多いことがわかった。その上位はホイットマン、グッドマン、レトケのアメリカの詩人であり、ローレムの歌曲におけるその3人の詩を概観したところ、口語による散文的な詩や情景描写、心情描写が明確な詩が中心であった。第3節では、その3人の詩による作品の中から6曲選び分析を行った。詩の内容と音楽的表現の関係における考察から、ローレムには、急な展開による情景描写部分と心情表現部分の対比的な要素があり、ピアノがその表現を支え増幅する特徴を導いた。そこには具象的な表現が展開に関わることもある。さらに短い音価が並ぶ歌唱旋律では、長い音価、リズムの変化、表示記号で重要な言葉を強調していた。以上の特徴を踏まえた言葉の表現として、母音を明確に響かせ繋げて発声し、子音はその母音を妨げないように、息の速度や発音の長さで発音するとまとめた。

第3章ではローレムの作品と同一の詩を持つ他の作曲家の作品と比較分析し、上記の特徴の検証を試みた。それにより次の4点が明らかとなった。1) 段階的に進行する展開。すなわち変化を抑えた反復音型と対比的な発展的音型、主題をもつ音型の主導的展開と心情表現が結び付き、段階的に進行する。音量の変化も段階的なことが多い。またその展開は急である。2) ピアノが情景描写と内的心情表現を担う。歌唱よりも強く表現している。3) 調性感の均衡。不協和音、非和声音により調性感が薄くなっても、無調ではなく調性的である。4) 短い音価が並ぶ歌唱旋律。重要な言葉は長い音価、リズムの変化、表示記号によって強調している。

その結果、次の2つの結論が導かれた。

1. 段階的で短期的に進行する明確な展開がある。詩の情景描写、心情表現と密接に結びつく音型、調性、音量を、簡素な部分、拡大部分、具象的に表現する部分として段階的に表わし、短い時間の中で次々と明確に展開する。
2. 情景描写と語り手の内的心情描写の重要な役割をピアノが担う。歌唱旋律では、短い音価が並ぶ類似した音型により音楽的発展が淡泊であり、ピアノが情景描写を担い、語り手の内的心情を拡大し描写する。

上記の特徴を踏まえ、詩の心情表現の展開を詩の内容、歌の旋律線、音型、調性、和音、音量、音域、リズムの変化から音楽の展開にどのように反映されているか判断し、短い表現時間の中で明確に描写し、より具体的で構築的に表出することが、ローレムの作品をより魅力的に表現することに繋がる。さらに、淡泊な歌唱旋律の心情表現の起伏を理解し、ピアノの表現と共鳴し解放して歌唱する。そのとき、詩を大切に作るローレム作品において言葉を明確に届けることは必須であり、明るく響くはっきりとした母音による理想的な発声の上で英語に特有の発音をし、母音を繋げたレガートな歌唱の中で、息の速度や発音の長さにより子音を発音する必要があると結んだ。

(総合審査結果の要旨)

〈演奏〉前半、ネッド・ローレム歌曲(15曲)、後半、ジョン・マスト「Dove Sta Amore」(全5曲)、リー・ホイビー歌曲(3曲)全てピアノ伴奏による演奏であった。(平成25年2月12日奏楽堂)

博士前期(修士)課程より、アメリカの作曲家による作品研究を続けて来た岩下さんのこの日の演奏は、その集大成と言うにふさわしい見事な歌唱であった。過去に行なって来た博士リサイタルで、時々指摘されていた発語、発声の固さが取れ、しなやかで表現力に富んだセンスの良さが際立つ、完成度の高い演奏であった。

〈論文〉 ネット・ローレム 歌曲の中で、アメリカ詩によるピアノ伴奏付き独唱歌曲に対象を絞り、詩の内容と音楽的表現の関わりについて、演奏家の視点から分析・考察を行なったものである。文章の重複が多い事や、共通の定義のない「ベルカント」等の言葉の使用等々、論文として整える必要に迫られる部分があるものの、演奏家の視点で、しっかりとした論を展開している。今後の同研究者への一助となる仕上がりである。

〈口述試問〉 上記を踏まえ、審査員 5 名による質疑応答を行ったが、誠実で明確な応答をしていた。以上、「(削除)」の成績をもって、合格とする。